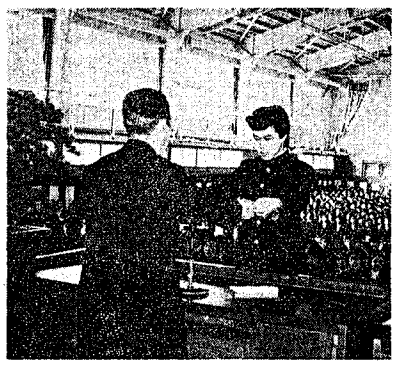
追浜高新聞

発行所
県立追浜高等学校
新聞委員会
横須賀市夏島町13
印刷　（株）中島所印所

三月の空に卒業式

初めての試み
テープによる答辞

三月一日、第一回卒業証書授与式が行なわれた。当日は晴れの日にふさわしい青空だった。後に国・公立等の試験が控えているにしては卒業生の出席率が良かった。やはり、長い人生の一こまり――新しい門出の日というものは、それなりに意義は大きいのであろう。


にこやかな中に緊張の一瞬

式はあますところなく、一時間余りで終了した。がその中で特に光っていたのは卒業生による答辞である。送辞もそうであるが、概してこれらのものは、今までは自体は特に意味はなかったと思う。やはり形だけで、内容はどれもこれも似かよっていた。答辞などはこういうものなんだ、という気持ちをさほど不自然にも感じず誰もが持っていた。卒業式に送辞や答辞がなかったら格好がつかないからやる、そんな感じだった。ところが今年の答辞は違っていた。まだまだ故郷すべき所は多いと思う。それでも、やはり新鮮だった。卒業生の一部で作ったのではない本当の意味での答辞だと思う。形だけはすばらしい言葉を連ねたのよりは、よほど真摯がこもっている。卒業生はいい所に目をつけたと思う。テープで卒業していく人達の声をじかに聞けるというのは貴重なことである。むずかしい事は抜きにしても、眠くならないだけでも利があった、と思う。

「仰げばとうとし」斉唱あたりまで来ると式も高まってもさそうなものなのに、何故か湧き上がる感慨がない。どうしてであろうかと思う。高校生ともなると卒業に泣いたりするのは恥ずかしいことなのかも。しかし卒業式のあの程度の演出では、それは当然のことのようにも思える。

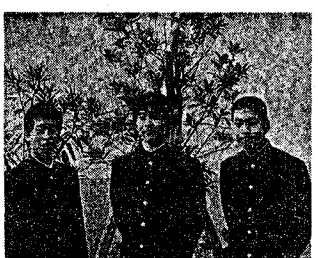
「蛍の光」の音楽にのりながら、引き上げていく卒業生の、実にうれしそうな意気揚々とした姿は印象的だった。上の学校に進学してゆく人、就職してゆく人、又は進学をもう一年見合せる人、皆、様々な道を力一杯生きて行こうという決意のみなぎった顔であった。

われわれの生徒会
新役員に期待

役員　前期　会長　山田真宏
　　副〃　岸川祥一
　　〃　武内亨子
　　後期　会長　岸川祥一
　　副〃　梶見勇次
　　〃　宇敷修一

今年一年生徒会を振り返ってみると、やはり不満発に終ってしまったった。まず、立候補者が、これは前期も後期もだが、期限までに一人もでなかったのだ。期限をのばして、その間にいろいろ説明があったのだろうが、やっと役員各々一人ずつ立候補者がでる、という状態だった。行事については例年どおりの文化祭、運動会、それから生徒会主催の球技大会、スキー・スケート教室などであった。

このように、最近生徒会というものが、機関化されて、ただ機能的に行事準備や、予算、その他もろもろの雑役を行なうのみになってしまっているようだ。本来生徒会とは、学校という集団を形づくる先生と生徒という二大柱の生徒の代表として、生徒の意見や要望を学校に反映させ、学校というものを生徒達自らで作りあげるべきものなのである。それが、ただ先生と生徒とのパイプの役割を果たすだけで、そして生徒の六無主義なともあいまって、一般生徒と生徒会は分離し、実際生徒は生徒会に対し無関心になっている。それとともに学校というものにも無関心になっているのだ。しかし学校というものは現にあるのではなく私たちで創りだして存在する。だから生徒自身も生徒会に、学校に関心をもち、生徒会も、もう一度生徒会のあり方を考えてほしい。朝礼の時生徒を並ばせるだけが生徒会の仕事ではないのだ。


（左から）桐生・岸川・宇敷君

部説
義務感と情熱

実を言うとこの新聞は、一度、新聞部員の大部分が、投げ出しかった代物なのである。

ちょうど原稿の持ち込みと、期末の試験が重なってしまい、そしてそれよりももっと困ったことは部員の多くが、この新聞を作ることに、やる気をなくしてしまったということなのだ。

試験の勉強と、新聞の仕事が重なって苦しんでいる時に、ふと考える。どうして新聞を作らなければならないのだろう。

最近は、新聞を出すことが、義務であるまうに思いこんでしまって、かなり追いかけられるような気持ちで、新聞を作っているのだ。けれど、しかし考えてみれば、新聞委員会っていうのは、委員会っていうの名前こそついているけれども、普通のクラブと同じで、自分の意志で入って、退めたくなれば退めていいわけだ。つまり新聞を出すことにおいても、生徒や先生や学校に対する義務などということでは、絶対ないわけで自分達が作りたいから、だから新聞を作る。新聞委員会があって自分達があるんじゃない、自分達がいて新聞委員会があるんだ。新聞のための配達じゃない、記事のための新聞なんだっていうことは、実はみんな、最初からわかっていたことなのだ。

ではなぜ、最近新聞を作る気がなくなってきたかというと、つまり今作っている新聞は、本当に自分達が出したくって作っているのだろうか、ということを考えたからなのだ。本当は、もっと違うものを作りたかったのじゃなかったのか。今作っている新聞は、単なる記事の羅列にすぎないのではないのだろうか。

新聞委員会の部員の多くは、最初はガリの新聞を作りたかったのだし、またそれぞれに、自分のやりたいことを持っていたはずなのに、まわりの意見や、自分達の怠慢や、その他もろもろによって押し流されていってしまい、だんだん自分達のやりたかったことから離れてゆき、結局残ったのは、新聞委員会なのだから新聞を出さなければならないという、有りもしない義務感なのである。

義務感というものからは、けっして積極的な情熱は生れてこない。これはだいたい何にでもいえることで、たとえば勉強に、についてでもそうである。単に勉強は学生の義務だと思ってやっている人は結局受け身の勉強しかできない。

そういう人は、自分が何のために勉強しているか、わかっていないのである。もちろん親が怖いとか、先生がうるさい等というのは論外である。まずそこに意味を見つけることだ。何のために勉強するのか。もちろん単一の理由だけではなく、いろんなものがからみ合っているだろう。だったらまずそれを解きほぐし、自分にわかる所から考えてみることだ。

勉強とは本来、権利であったはずのものだ。それがいつのまにか義務にすり変ってしまったとしたら、それはどこかで、思い違いをしているからだ。もちろん義務にならざるをえない、今の体制にも問題はあるが、まずは自分から。

あんわすみ
ナゾナゾ遊び

近頃、やたらと下らないナゾナゾ遊びが、はやっている。問題を聞いているだけでも、滑稽なのにその答えたるやクレヅきわまりない。『ねえ、知ってる』と言って仲間の中にもぐり込む自分でも吹き出しそうになりながら問題を披露する。

聞りの人も初めから真剣に考えるなんて事はしない。そして、答えを聞いて、みんなドッと笑う。ただそれだけのことなのだ。例えば「つばめが空を飛びました。次に、かもめが空を飛びました。次に亀が空を飛びました。さてなぜでしょう」答えは、「友情で飛んだ」亀だろうが、猫だろうが何でもよいのだ。答えも、これだけではなく、もう一つあげると「新幹線の中で天皇陛下が急に皇后陛下をぶちました。なぜでしょう」答えは、「皇后陛下が、天皇陛下にガンタレしたから」二つとも、問題らしい問題もなく、答えらしい答えもない問題なのである。なぜ、このようなナゾナゾ遊びが、はやっているのかはわからないし、誰が初めに言い出したのかもわからない。コチコチ頭の大人から見れば、馬鹿らしい事だろう。でもこの馬鹿らしい事も今だからこそ面白いのではないだろうか。

季節風

七日は公立高校の合格者発表だった。早春の陽ざしが暖かく満ちて、なにかも緑が鮮やかであった。『弥生』という言葉をただ繰り返しているだけで、みずみずしく感じられてくるのは妙であるが恐らくは、古人が鋭く季節に感応し、その純粋な気持ちを、素直に言葉に託した証拠であろう。

やがて掲示板が運びだされ、人の群ができる。喜ぶ者がい、悲しむ者がいる。少々大袈裟に言えば合格した者は華麗にさえ見える。だが、決して虚無的な意味ではなく、その喜びとはどんな内容を持つものかと疑わずにはおれない。かつて私もその渦中に身をおいた一人である。悲しみと共に強い自己嫌悪を味わったこともあり、又逆に、それが苦渋であればそれだけ、喜びの甘美なことを夢想していた。そしてようやく合格の知らせを受け取った時、一瞬は嬉しかたい喜びであった。ところが、求めてやまなかったはずの喜びがものの十分もたたぬうちに、まるで浪がひくように、すばやく退いてしまっていた。後には不可思議な安堵だけが残った。

今考えてみれば、その喜びが、自らの力だけでなったものと解釈していた処に、最も大きな誤りがあったように思う。『自らの力だけ』という誤解とは、父母等の助力も忘れてはならぬという意味ではなく、照準を常に相対的なものに置きながら『自らの力だけ』と思いこむ矛盾をいうのである。相対的な基準のみで本心を造りあげることはできぬ。相対は常に動くものである。従って、一つの本心を永遠にするためには、永遠に相対物とともに動かねばならず、言うまでもなく無理なことであろう。受験は相対的そのものである。が、だからといって虚無的になる必要はなく、素直に喜べばよいと思う。ただ、その喜びが、ある結果の単なる現身の一つであり、振り返ってみれば、目指していた時の苦しみの過程の中にこそ本当の喜びの多くのものがあることを忘れなければそれでいいのである。

写真の御用命なら
モリタ写真館
横須賀市三春町四―六〇
TEL　二六―一四四九

黒川
スポーツ用品店
追浜東町　3―65
TEL（65）5228

フランス菓子と喫茶の
まつを
追浜第2共同ビル
TEL（65）3569

駒澤大學
■大学院
人文科学研究科　経済学研究科　商学研究科
法学研究科　経営学研究科
■学部
経済学部　経済学科　商学科
法学部　法律学科　政治学科
経営学部　経営学科
文学部　国文学科　英米文学科　地理学科
歴史学科　社会学科
仏教学部　禅学科　仏教学科
経済学部第二部（夜）　法学部第二部（夜）
経営学部第二部（夜）　北海道教養部
■短期大学
国文科・英文科（女子のみ）　放射線科（共学）
仏教科（夜）
〒154 東京都世田谷区駒沢1の23の1
☎（03）422－6111（大代）
駒沢大学広報課B係

早稲田の春に拾う
入試あれこれ

私学の名門、在野精神・反官僚的体質で名高い、早稲田大学を取材した。

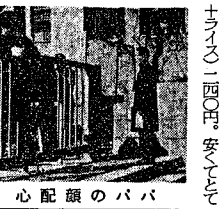
まず、早大に行って規模の大きさに驚く。三万人以上も学生がいるのだから無理はないと思うが。早大を中心に街が成り立っているようである。

早大の回りは、雀荘と本屋（専門書を扱っている所が多い）、角帽屋、喫茶店が多い。角帽屋へ行ってみた。三千円位からある「マスコット角帽」なる物もあり、記念に買って行く人も多いそうだ。角帽は入学した時ほとんど買うそうである。角帽に憧れて入る学生も少なくはないのだろう。しかし、この角帽、二十年前ごろからだんだんかぶらなくなり、ヒートルズの影響で長髪が流行りだした頃から、かぶる人はほとんどいなくなったそうである。今は運動部ぐらいしかかぶっていない。トレンチコートに角帽というスタイルのおもしろい早大生もいた。やはり、角帽は早大のシンボルというのだ。

受験問題速報に見入る

校門前の早大指定の本屋のおじさんに、早大の校風の変化を聞いてみた。「素朴でまじめで、泥臭くって、田舎っぽい所は今も昔も変わりませんね。でも読む本の質が落ちました。今の学生は入門書ぐらいしか読まない。昔の学生はもっとむずかしいのをたくさん読みましたね。今の大学院ぐらいで読むのを読んでいました。それは今では早大はエリートでなくだれでも入れるようになったからでしょうか。」

我々取材班は、早大の校内にある学生食堂で昼食を食べた。カレーうどん・ラーメン・そば一二〇円。ランチ類一三〇〇円、早稲田ランチ（ハンバーグ＋コロッケ＋キャベツ＋スパゲッティ＋ハムライス）二四〇円。安くてとてもおいしかった。


心配顔のパパ

ちょうど、理工学部の入試だったので、合格電報（四〇〇円）の予約をしていた。そしたら、パイの早大生が「そこの人、どうですか」と言った。「私達高校生です」と言ったら、「来年の為にどうぞ」と言われてしまった。

早大新聞部の学生が、「断固、授業料値上げを阻止すべきだ！」と、がんばっていた。そして私たちにも、阻止できるまではがんばると力説していた。おもしろい学生ばかりである。

早大生の二〇％が、奨学金を利用している。少し変った所では、『大隈記念奨学金』というのがある。これは、大隈重信を記念し、学業優秀、教育上経済上援助が必要と認められている者に与えられる。

又、早大は、サークルが非常に多い。文化系だけでも二〇五ある。異色な所では、宇宙・円盤研究会や野草を食べる「なべの会」、密室劇研究会、そして「部落問題研究」など、きりがない程。現存する社会に目をつむり、そこから逃避するのではなく、その中で確固とした『信念』を作り上げることに大きな役割りを果している。

最後に英語についての早大の入試傾向を。客観テストで読解を中心とするオールラウンドな実力がためされる。文法・構文・熟語をよくマスターしておけば十分答えられるものだそうだ。

早大の象徴大隅講堂

やはり、さすがに"早稲田"だなあと思った。非常に魅力ある大学である。

寒風の朝走る
名物の耐寒訓練

一月二八日から三一日にかけての四日間、毎年恒例の耐寒訓練が行なわれた。雨天の場合でも日延べや中止はせず、校舎内を走る予定だったが、幸い一日も雨は降らず、良い天候に恵まれていたといえる。以下、その四日間の潜入レポートである。

初日――参加人員＝一年一五三名、二年一〇八名、三年一三名、合計一八二名。

朝六時半までに、着替えをすませ校庭に出る。やはり寒い。集合がかかり準備体操をすませると、いよいよ出発。学年別、男女別にスタートする。校庭を出て、すぐそこの追浜橋を渡ると、立ち並んだ家の間の路地へと入ってゆく。スピードは、たいして速くはなく、みんな友達と話などしながら走っている。身体が暖まってくると、しばらく走ると小さな階段があり、低い柵があるが、誰もひっかからずに飛び越してゆく。公園の中をつっきり、歩道橋を渡り、夕照橋を渡るともう野島。これで約半分ここから男女のコースが別れる。もちろん男がロングコース、そして頂上へと至る恐怖の坂道の入口で二つのコースは合流する。この坂道は全コース中最も苦しい所で、角を曲るたびに、先の長さにガックリする。やがて頂上へ着き一休み。一番気分の良い時。そして同じ道を戻って学校へ帰る。

二日目――一年一五三名、一年一〇七名、三年一九名、合計一七九名。

野島の上でなわ跳びなどをして遊ぶ。他は前日と変りなし。

三日目――一年一〇五名、二年一二二名、三年一三名、合計二四八名。

なぜか急に人数が増える。頂上でジェンカをやる。他は前二日と同じ。

最後日――一年二六六名、二年一八九名、三年五六名、合計五一一名。

おまんじゅうを狙ってどっと生徒が押しかける。中には前夜電話で、全員出撃命令の出たクラスもある。三年間皆勤賞は、八名。

以上のような具合だが、もっと人数が増えても良いはず。来年は絶対出よう。気持ち良いよ。

50年度入試速報
受験者の声

だんだん春めいて来た毎日だが大学入試に泣いた人、喜んだ人、様々である。その中で特に、理科大に合格した先輩、惜くも失敗した先輩の声を記す。貴重な声なので、今後の良き教訓としてほしい。

成功談

大学受験についてさほど深く考えなかった僕だったが、さすがに十、十一月ともなると焦りが出て来た。そこで、これでは駄目だと思い、数学は全体的に浅く、英語は基礎力の向上に重点を置いた。僕自身"やった"という満足感が欲かったのだ。その満足感からつながった自信のおかげで、試験場でもあがらずに済み、英語の悪さを数学、化学でカバーできた。

最後に、自分の経験から参考になるだろう事を列挙する。

一、英語はどこを受けるにしても大切なので特に力を入れる。

一、十二月までに一通り受験勉強を終える覚悟でいる。

一、受験勉強中は『今年は入る』の気持ちで、入試本番中では『来年がある』とのんびりムードでやる。

一、試験場での雰囲気にのまれず自信を持って答案を書く。

失敗談　浪人のススメ

「何故、浪人生となったか、それは受験校が私の実力以上のものであったからに他ならない。勉強以外のことに熱中しながらも、公開模試の結果は"十分合格圏にアリ"などと出たりした。それに甘えて二月以降の最後のツメがたりなかったのだと反省している。しかし、在学中、やるべきことはやったと（勉強以外の面で）満足している。そのために一年間を受験に使うという代償は、当然であろう。人生に一度の大学である。入った後にプライドのもてる大学でありたいと願うのは皆同じだと思う。高校を大学受験と切り離すことは不可能だけれど、在学中にしかできないことを絶対にやるべきだ。受験地獄なんて言葉は無用である。君達は青春のまっただ中を生きてるんじゃないか、ボンヤリ過ごすではないゾ！

今年の三大出産

国語科の渡辺先生御出産

二学期の半ば頃から出産の為、休んでおられた国語科の渡辺先生が十二月二十日に次女展子ちゃんを出産された。この展子ちゃんという名はのびやかに、心広い女性に育つように と付けられたそうだ。

教育方針ならば別になくて、育つように育てば良いとのこと。ただ、赤軍派のように人に迷惑を掛けるような人にだけは、なってほしくないそうだ。

「暇になったら実物を見に来てください」と、もう顔がほころびっぱなしで、とてもしあわせそうでした。

"貴の花二世"誕生

昨年十一月、数学科の出口先生に「勇貴康」ちゃんが誕生。先生の貴の花びいきは有名ですが、もちろんこの名前にも「倒れても倒れても立ち直る貴の花のように何事にも一生懸命になれる人に」という願いがこめられています。放任はしないけれど、伸び伸びと育てるつもりだそうです。「子供の顔を見るといやな事忘れるね。二人めになってようやく"親爺"になった気がした。今度はあと一人女の子がほしいな」とおっしゃる、子供好きの先生らしいお話しでした。

図書室の大内さん御出産

図書室のドアをあけ、中へ入って行くと、大内さんがおられた。さっそく、お話を聞いてみる。お子さんが、生まれたのは、昨年の八月八日、名前は基司（もとし）君、誰がおつけになったのですかと聞くと、恥ずかしそうに「主人です」。将来は健康でたくましく育ってほしいとのこと。『厳しやっと起き返りやバックが、できるようになったのよ。でも今は無我夢中だし。ただかわいいだけ』とにこやかに目を細められている大内さんでした。

屋根のない車

旅とは何であろうか。そして何故旅をするのだろうか。

主人公隆（りゅう）、彼は何かを求めて旅に出たのではない。ただ日本を逃げ出して、カナダのバンクーバーにいた。彼はいわゆるヒッピーだ。そこではコミューン（共同体）生活があった。そこでは私たちが日常暮している世界とは違う、全く自由な、人間と人間のかかわりが優しい、ユートピア的な世界をみせてくれる。しかし、その町で彼の好きだった『おやじ』が死んでしまった。彼はまたバンクーバーから旅に出た。今度はジーンという女の子といっしょの楽しい旅、それから彼は、ルクセンブルグで風間という男と会った。彼は昔「おやじ」と親しくしていた人だった。風間は、仲間はみんな自由で心がある。そこでは私たちが日常考えている。旅とは何か。風間は言う。「日常をふりさげていくのを旅行といい、旅とは日常をおいてくるものだ。そして常に自分を裏切っていくことだ」常に自分を裏切っていく、それが風間の生き方であり、死であった。そして裏切るためにアリバイを作った。彼はAであるが、Bはアリバイであった。そしてそのように完璧なアリバイでもって彼は死んだ。それは彼自身道化だいった自殺であった。

その死を契機として、また隆は旅立った。「さよならすべきものは日常ではない。さあ、アリバイにさよならだ」「だが同じことだ。旅も日常も、留まる者は冷酷に気づかないだけだ」彼は屋根のない車を駆って砂漠を彷徨する。彼は日常を脱出して……。

私たちは生きている。しかしただ日常にのっかって時を過ごしているだけではないだろうか。本当は生きようとする者にとって生きることは能動的なものであるはずだ。それは日常というものから飛躍するのだ。飛躍して、新たな日常へ、そしてまた飛躍して。私たちはこの日常に甘んじていてはならない

河村季里著
角川出版　定価一〇〇円

マラソン大会・報告

先君たちがおこなわれたマラソン大会の結果は、次のように決まった。

個人順位　一年男子一位＝安部誠司（七組）21分8秒、以下井田治（六）、渡辺嘉敏（三）と続く。一年女子一位＝半沢樹（七）12分28秒、以下三毛すず子（九）、小川仁子（八）。二年男子一位＝秋山英夫（二）21分24秒、以下宮脇初志（七）、天宅健（二）。二年女子一位＝松井一葉（八）12分0秒、以下永松浮子（三）、金子寛（二）。総合では男子二年の安部、女子二年の松井がそれぞれのトップ。

団体順位　一年男子一位＝一組以下九・三・四・七・五・六の順。八組は人数不足。一年女子一位＝四組以下二・一・五・六・七・八。不足三・八組。二年男子一位＝七組以下一・四・二・八・五・三、不足六組。二年女子・全クラス人数不足。

永すぎた春に終止符

三月十六日（日）ついに体育科の矢島博先生（27）が結婚！相手は県立横須賀高等学校時代の同級生のまさ江さん（旧姓市川さん）交際が始まったのは大学を出てからで、二十七歳という年齢にそろそろあせりだしたのが、昨年の春婚約した。「あれはさなぎから孵ったモンシロチョウが菜の花畑に舞う頃だった」矢島先生はうっとりと目を回想しはじめた。「奥様はどんなかたですか？」との質問に「うーん、背が低い。すべて満点」とのお答え。仲良く、恋人同志のように暮らしたいなんてとてもうれしそうな顔で話してくれました。いつまでもおあわせにね。

短期大学は、例年、青山女短大、共立女短大、学習院女短大、実践女短大に集中する傾向があるが、本年度もその傾向が一層強まっている。

編集後記

★発行前夕！本当にたいへんだったんだから。でも今は幸せな私なのです。

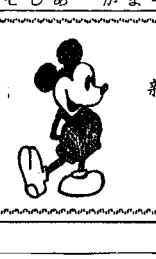
★今、印刷所の終業のベルが鳴ったのです。やっとできました。ハアーへたれた。もうダメ。P

★あはははははは！　遂に終っちゃったぞ、もう！　良い新聞だろ、やい感心しろ！　シューエッ

★新聞を作るということは、簡単な事ではなかった。私の考えが甘かったのこの一言なのです。　万太郎

★やっと終った。これでもう、レイアウトをして狂うこともない。ああ、うれしいナ。　夢の島

★一年生の皆様！お願い、入部して下さいナ。忙がしいけど、楽しい書員会ですよ。　M＝モンロー



新聞部員
募集中だよ